

南予の三校に見る、
実業学校の時代

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー

「必ず邑むらに不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す」と高らかに国民哲学が謳われたのは、明治5年の学制発布だった。それ以後、紆余曲折の中で兎にも角にも殖産興業・富国強兵の路線が貫かれ、矢継ぎ早な近代化の時代は進行する。やがて日清戦争の後、諸外国に認められ始めた頃の同32年、実業学校令が施行される。名実共に近代国家となる過程で得た実利として、産業界が発展期に入り、その人材養成が急務となった社会変化だと言えることが出来る。

【東宇和郡立農蚕学校】

南予においては、明治41年5月に農蚕学校が創立をみる。3年前の郡農会で建議され、宇和と野村で立地争いがあった

ものの待望の開校であった。この設立に尽力した人物が末光績しげひこ、地元の中町出身にして札幌農学校の卒業生。彼はクラーク博士の門下であった尾見五郎を招聘、初代校長とし、教師陣も同校出身者を中心に学校運営の基礎とした。こうした教師側の人格は周辺でも群を抜き、農業系学校に不可欠な実習地も教師や生徒自らが汗して造成された。クラーク精神の“紳士たれ” “自由教育”を柱に、人間形成と地域開発の充実した教育が実践されていった。現在の県立宇和高等学校の正門を入ると、大正2年に建つ「剛健の碑」があり、当時培われたその伝統を物語る。特に宇和郷の養蚕業は地域を豊かにし、そうした南予一円の底上げは、大正初期に愛媛が西日本一の養蚕県となる事にも寄与したと思われる。同7年には県立宇和農業学校と改称。



校長尾見五郎による揮毫「剛健」の碑

輩出した人材には、同11年に四国で最初のメーデーを実施した日吉村の旧庄屋で戦後社会党代議士となった井谷正吉（第4回生）が居て、その回想によれば、2年生時に護憲運動の尾崎行雄が来校し、講堂でその講演を聴いている。第8回卒業生には菅原傳つとむがおり、末光績校長（三代目）の薫陶を受けたものか、日本体育専門学校（後の日体大）の設立に参画、戦後は郷里に戻り、魚肉ソーセージのスモークミート開発（昭和25年西南開発設立）や、後に開明学校保存につながる（社）宇和郷土文化保存会の設立（昭和48年）など、八面六臂の活躍を見せる。

【私立（伊方）実践農業学校】

大正3年4月、実業家佐々木長治によって伊方村（当時）湊浦に実践農業学校が発足する。氏は銅鉱山経営のかたわら、西南銀行の創設、豊後電気鉄道の設定にも関わる立志伝中の人物で、地



旧佐々木長治家（明治38年築）